



Title	知的障害のある青年達の音楽行為：曲づくり・歌づくりの事例分析による
Author(s)	下出, 美智子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【38】

氏 名	しも 出 美 智 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 9 2 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	知的障害のある青年達の音楽行為―曲づくり・歌づくりの事例分析による―
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 根 岸 一 美 (副査) 教 授 奥 平 俊 六 准教授 伊 東 信 宏

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、申請者が勤務していたある大学の附属養護学校（現在は特別支援学校）高等部の青年たちに、自由な発想で表現できる「創作ミュージカル」の活動に取り組ませ、そこから現れてきた音楽の在り様を記述し、知的障害のある青年たちがどのように音楽に関わっていくのかを探った研究であり、序章、第 1～第 5 章から構成されている（A 4 判 102 頁）。

基礎となる資料は、申請者自身が 1993 年から 2001 年まで、知的障害が軽度な青年たちを対象に、カール・オルフ（Carl Orff）の音楽教育のアプローチを参考にして構想した、独自の「曲づくり」（楽器音を中心として、その使い方や組織の仕方を試行錯誤しながら、即興で自分なりのまとまりのある音楽作品に作り上げていく活動）と「歌づくり」（短い詩に自由に旋律を付ける活動）を、ビデオカメラで収めた録画である。これをもとに、①青年たちはいかに音楽行為を展開するのか、また、展開しうなのか、

②彼等が曲や歌を生み出す際に、身近にある言語が表現媒体としてどのように機能しているのか、③またそこで、内面のイメージがどう働いているのか、④彼等の音楽行為には健常と言われる青年には見えにくい、しかし、奇異や異常という意味ではない独特の面白さがあるが、そのような独自性はどこにあるのか、という観点から考察を行っている。なお「知的障害」とは平成 14 年に文部科学省特別支援教育課から出された「就学指導の手引き」などにに基づき、「認知や言語という知的機能が明らかに平均より低い、また、意志の交換や日常生活や社会生活等に関すること、つまり、適応行動に障害がある、という、これら双方の障害が 18 歳以前に現れる場合を知的障害と捉える」としている。

序章で研究動機や先行研究などについて述べた後に、第 1 章「絵本『ころころころ』を題材とする曲づくりの諸事例」では、青年たちの音楽行為の特徴的な点を、『ころころころ』という絵本を題材とする曲づくりを通して紹介し、彼らが絵本を言葉（擬音語・擬態語やストーリー）や身体の動きで遊び、言葉と音楽、動きと音楽を結び付けて曲を生み出している姿の観察の結果を記述している。第 2 章「音楽行為にみられる言葉と音楽（曲）との関わり」では言葉、特に擬音語・擬態語からの曲づくりに焦点をあてて、言葉と音楽がいかに関連しているのかについて考察し、その結果、曲づくりにおいて、言葉と音楽は密接に関連しており、曲の原形を形成する段階では擬音語・擬態語（言葉）の音声・音響としての形態が、そして曲を拡張深める段階ではストーリー（言葉）の意味・内容の側面が作用している、と述べている。第 3 章「音楽行為にみられる言葉と音楽（歌）との関わり」では、言葉の中でも短い詩を取り上げ、音楽と歌との関連に焦点をあてて考察し、その結果、青年たちは日常の話し言葉の抑揚やリズムを強調したり、それまでに経験してきた旋律様式に当てはめたりするという方法で、歌を生み出しているとの所見が示されている。第 4 章「音楽行為におけるイメージの働き」では、曲づくりを行う過程で起こる内面のイメージの働きを探り、その結果、青年たちの内面には表したいものと関わってイメージが起こり、そのイメージは変化し、またイメージの変化に伴って作品も変化していく、つまり、彼らはイメージと作品の相互作用によって、曲づくりを進展させていくことができる、としている。第 5 章「知的障害のある青年達の音楽行為における独自性」では、これまでに扱ってきた 15 の事例を基に、青年たちの音楽行為の独自性について身体的作用ならびに言語的作用の面から論じている。そして、青年たちの音楽は生のエネルギーに満ち溢れ、また、そこからは安らぎやぬくもりが伝わってきて、そこには我々を惹きつける力があると述べ、結びとしている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は音楽学の通常の研究領域においてはあまり扱われたことのないテーマを取り上げているが、人間の音楽活動を幅広く探究するという観点より十分に音楽学の論文としての意味を有するものと位置づけることができる。しかしながら「知的障害のある青年達の音楽行為」という問題設定は、固有の専門研究領域に属する部分がむしろ多く、論文の審査にあたっては困難な面があったことも否定できない。2010 年 2 月 8 日（月）に行われた口頭試問においては、その問題が如実に露呈される結果となった。ここでは申請者から予め審査用補足資料として審査委員に貸与されていた当該授業の映像音響記録に基づく質疑が示されたが、青年たちの音楽行為がつまるところ、当論文で謳っているのとは異なって、指導者からの音声言語による誘導に基づいて行われている部分が非常に多く、本来的には自発的であったとは言えないのではないか、との疑問が投げかけられた。そして、自発的であるためには「合奏」である

よりも個人として音と向き合う形のほうがむしろ想定外の本来的自発性が見られる可能性があり、また、最終的に「発表会」を行っているのも、やはり自発性の観点からは疑問であるとの指摘も行われた。また「知的障害」にもさまざまな広がりがあり、そのような多様性についての着目が乏しいのではないか、さらに、青年たちの作り出す音楽が「自然なままの歌」であるとする点についての疑問や、彼らの音楽についての「解釈」が当論文の目的において掲げているようには示されていない、などの指摘も行われた。このように本論文については多々問題点があることが示されたのであるが、口頭試問後に審査委員の間で検討を行った結果、本論文の研究においては、「自発性」についての根本的な問題を抱えているにしても、申請者が青年たちの音楽的能力をできるかぎり評価しようと懸命に努力したこと、また、彼らの行動とその成果としての作品について、可能な限りの文章ならびに分析図式による表現によって描き出し、今後の研究にむけての手がかりを示したことについて、その先駆的ともいえる意義を認めるに至った。これらのことにより、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。